

被災農地における 土づくりの推進による 生産性の向上

計画期間：令和2～3年度

対象：（株）宮城リスタ大川，
（農）みのり，（株）ゆいっこ

チーム員：◎阿部定浩，遠藤貴司，小野愛実，
児玉彩，岩間睦実，遠藤弘樹

1

課題の背景（1）



課題の背景 (2)

津波被害 (長面地区)



震災前 (平成7年7月)



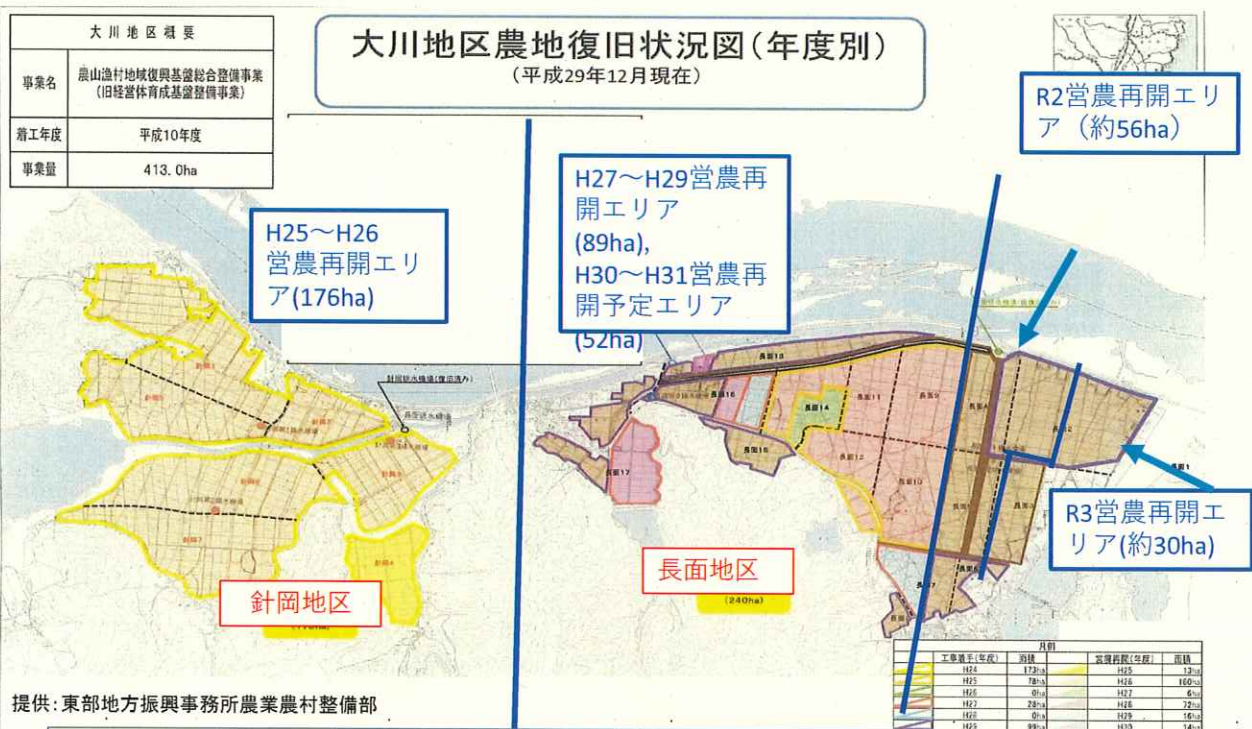
震災後 (平成23年4月)

津波による甚大な被害

農地への海水・土砂・瓦礫の流入, 作土の流失,
農業機械・施設の流失・水没等

提供: 東部地方振興事務所農業農村整備部 3

農地復旧状況



震災後, ほ場整備事業により徐々に農地が復旧し, 営農が再開
経営の規模拡大に対応した省力化技術の導入・定着

令和3年水稲作付け開始エリア



- ・山土を客土しているため アンモニア態窒素※が 0.3kg/10a と低い。
→ 継続的な土づくり・地力向上が必要
(稲作指導指針アンモニア態窒素の目標値は8~12kg/10a)
※: 30°C 4週間培養値

5

活動事項と目標 (当初計画)

◆定性的目標

- 1 地域内有機物循環システムが構築され、地力が向上し、水稲の収量向上・安定が図られ、有機物施用による土づくりが継続的に行われる。
- 2 農地復旧の進展に伴い、更に規模が拡大する大規模稲作経営法人において水稲乾田直播栽培への取り組みが拡大する。

◆活動事項

- 1-1) 水稲土づくりモデル実証ほ設置による効果検証支援
 - ・堆肥を施用した水稲の増収効果の検証。
- 1-2) 地域内有機物活用計画・経費試算及び供給量調査
 - ・地域内畜産法人・農家の堆肥供給意向調査で供給可能量を把握する。耕種法人の堆肥利用に向けた課題と需給バランスを把握する。畜産法人と耕種法人・農家のマッチング、堆肥利用・供給を継続するための仕組みづくりの検討。
- 2 水稲乾田直播栽培実証ほ設置による効果検証支援
 - ・生育ステージの把握と栽培管理技術の定着、土地利用型法人の稲作部門内の労働力の配分(春と秋作業)の検証。

※ 定性的数値目標 復旧農地での堆肥施用ほ場における水稲玄米収量(坪刈り反収)

R1: 430kg/10a → R2: 445kg/10a → R3: 460kg/10a

6

活動事項と目標に対する令和2年度末の進捗と自己評価（1）

【自己評価の「○」は達成、「△」は一部達成、「×」は未達成を表します。】

1-1) 水稲土づくりモデル実証ほ設置による効果検証支援（定量的数値目標）

- ・実証ほの設置(①2t/10a, ②1t/10a, ③無施用), 生育調査(5回), 収量調査(1回), 現地検討会(7/7), 成績検討会(1/13), 意見交換(随時)

→ 坪刈り10a当たり収量 ①2t/10a : 545kg/10a (110% : 無施用対比)

②1t/10a : 478kg/10a (97% : 同)

③無施用 : 494kg/10a (100% : 同)

- ・現地検討会, 成績検討会を通じて, 対象3法人が改めて実証ほでの堆肥の効果を実感したと感想を述べた。 ○

※ 数値目標 : 復旧農地での有機物投入ほ場における水稲玄米収量

(坪刈り単収) R1 : 430kg/10a → R2 : 445kg/10a → R3 : 460kg/10a

→ 令和2年度目標 : 445kg/10a < 実績545kg/10a ○



現地検討会の様子 (7月7日)



成績検討会の様子 (1月13日)



ゆいっこの堆肥散布の様子

活動事項と目標に対する令和2年度末の進捗と自己評価（2）

【自己評価の「○」は達成、「△」は一部達成、「×」は未達成を表します。】

1-2) 地域内有機物活用計画・経費試算及び供給量調査（定性的目標）

- ・地域内の畜産経営体の堆肥供給意向聞き取り調査により, **地域内堆肥供給可能量を把握するとともに, 耕種法人と情報を共有した。**
- ・畜産1法人・2経営体とリスタとの意見交換を開催し (8/28), R3年産水稲作付に向けて, リスタが設置した長面地区内の堆肥一時置き場に**畜産1法人**が堆肥の運搬を開始した (8/29)。**2経営体**は針岡の一時置き場に運搬を開始した (**マッチング**)。 ○

→ R4年産以降の堆肥利用計画・供給計画作成, 利用・供給仕組みづくりの検討 △



畜産法人・農家・耕種法人
意見交換会の様子 (8月28日)



リスタの堆肥散布の様子
(12月2日)

活動事項と目標に対する令和2年度末の進捗と自己評価（3）

【自己評価の「○」は達成、「△」は一部達成、「×」は未達成を表します。】

2 水稲乾田直播栽培実証ほ設置による効果検証支援（定性的目標） （生育・収量調査，労働力の配分（春と秋作業）の検証）

- ・実証ほの設置(1ほ場)，生育調査(8回)，収量調査(1回)，
現地検討会(7/7)，成績検討会(1/3)。

→ 除草対策と施肥管理ついてほ場で意見交換。課題と改善策について情報共有した。R3年産でリスタ再開，みのり開始，ゆいこ取組拡大・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・○

→ 土地利用型法人の稲作部門内の労働力の配分（春と秋作業）の検証。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・△



出芽・苗立ちの様子（6月2日）



入水直後の生育の様子（6月10日） 9

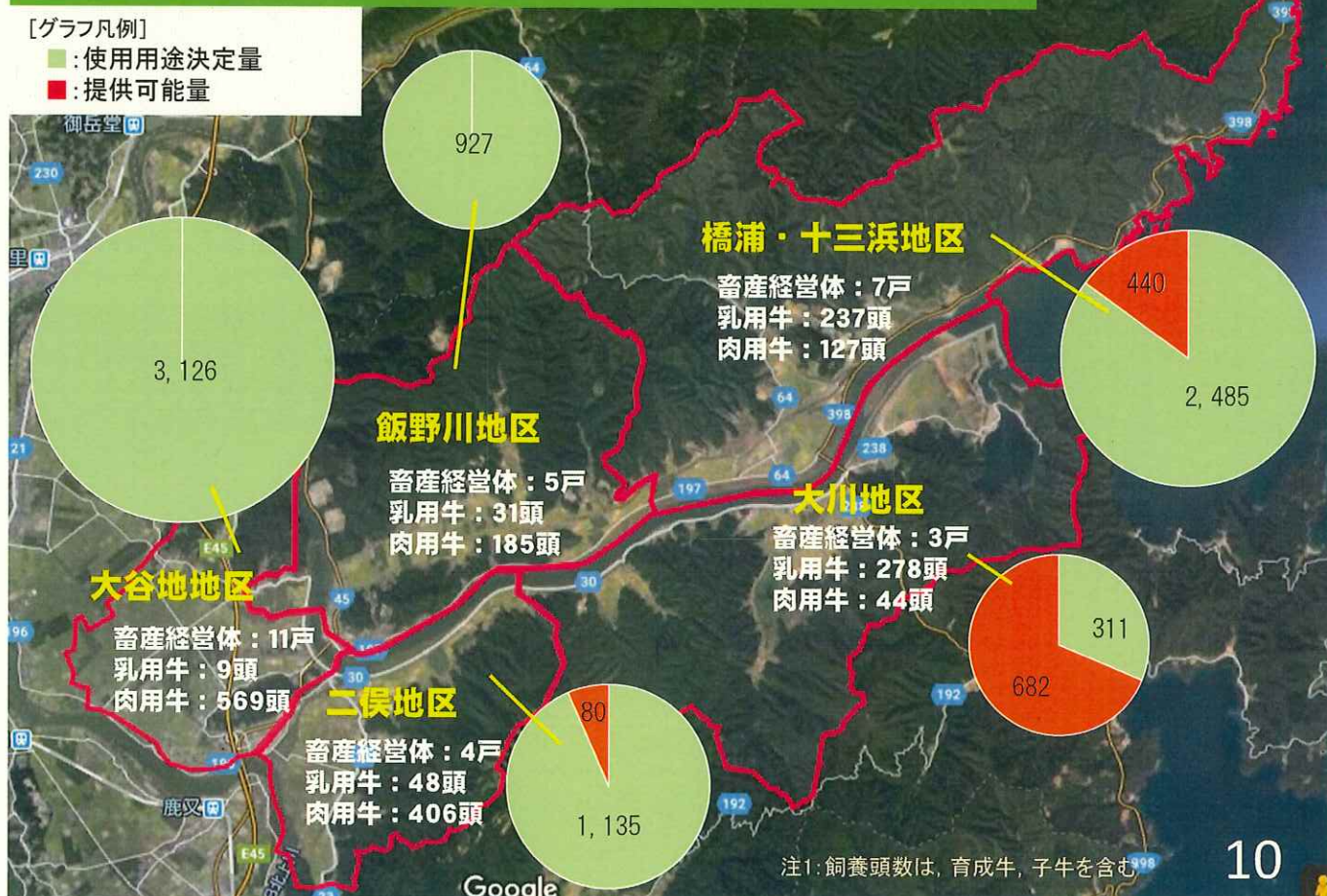


耕種農家に新たに供給可能できる堆肥量

(令和2年7月調査時点)

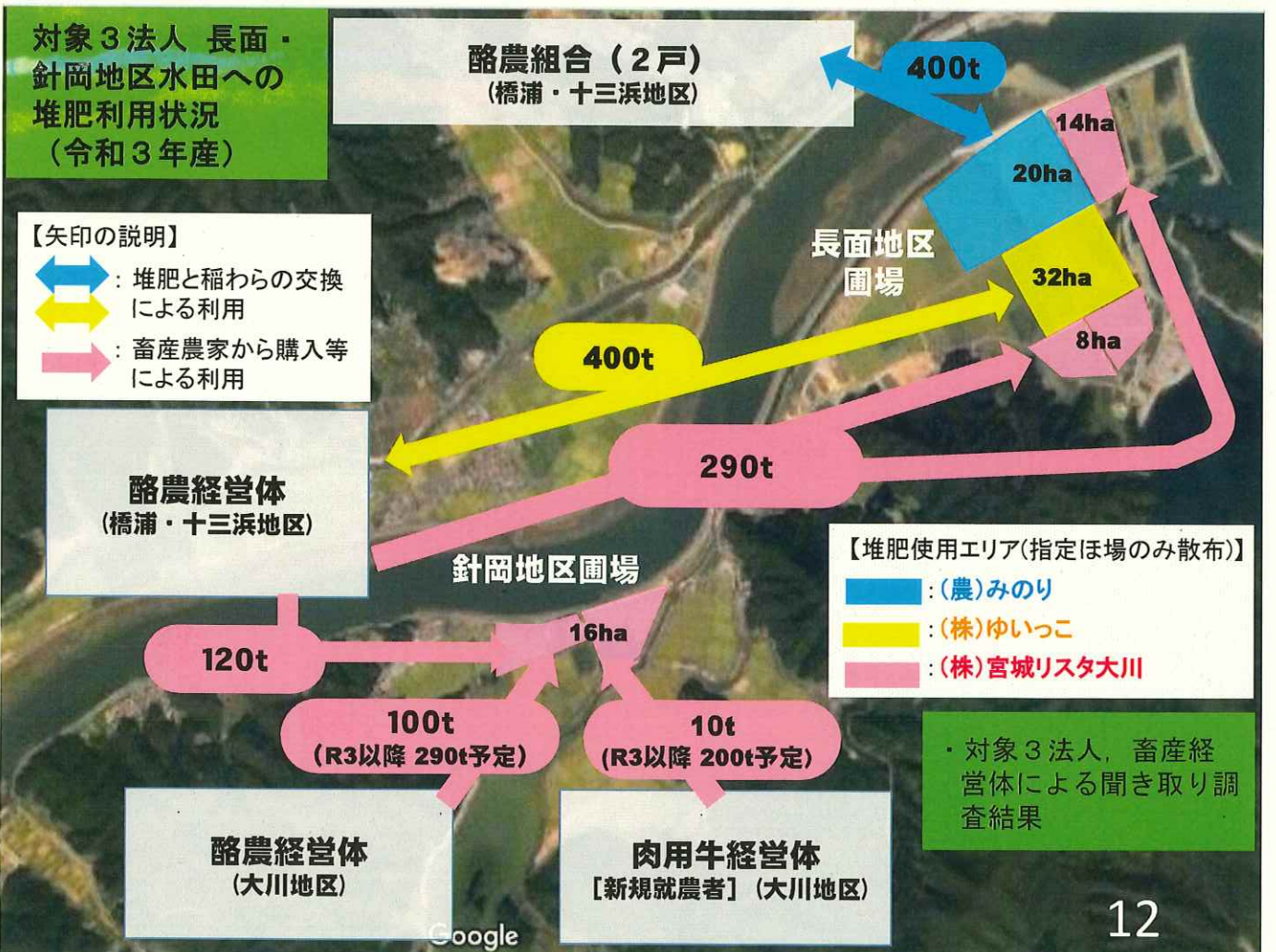
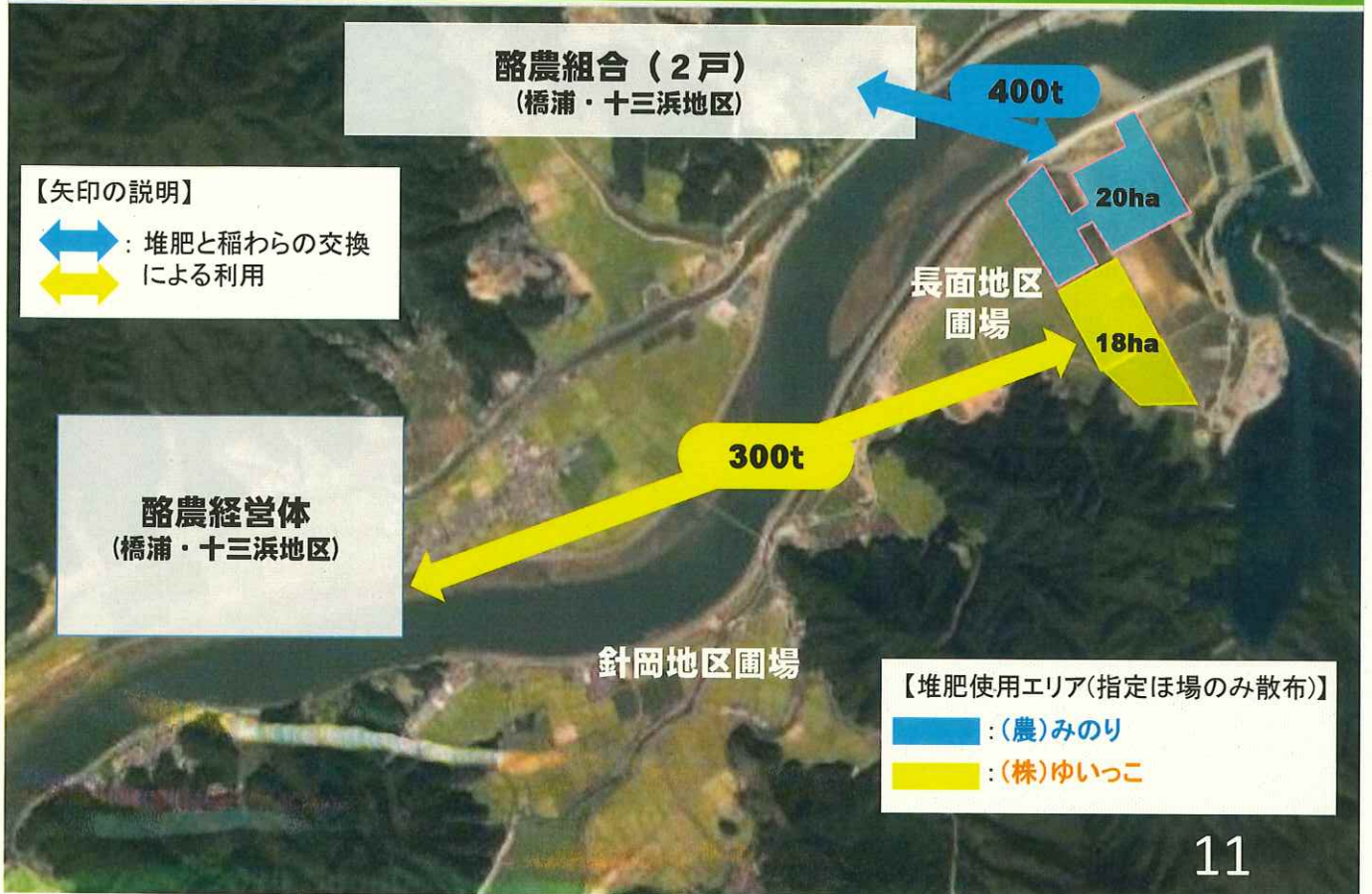
供給可能量は聞き取り調査による。堆肥センターの供給可能量は含まず。(単位:t)

- [グラフ凡例]
■: 使用用途決定量
■: 提供可能量



対象3法人における長面・針岡地区水田への堆肥利用状況（令和2年産）

・対象3法人，畜産経営体による聞き取り調査結果



活動事項と目標に対する令和3年度の活動（1）

1-1) 水稻土づくりモデル実証ほ設置による効果検証支援（定量的数値目標）

- ・堆肥施用実証ほ設置（①2t/10a, ②1t/10a, ③無施用, ④リスタ計画散布, ⑤みのり計画散布, ⑥ゆいっこ計画散布）
- ・生育調査（3回）・収量調査（1回），現地検討会(7/12), ほ場での情報交換での効果の検証（随時），成績検討会（1月20日）

→坪刈り10a当たり収量①2t/10a：543kg/10a（140%：無施用対比）

②1t/10a：454kg/10a（117%：同）

③無施用：389kg/10a（100%：同）

客土の土性・地力により生育量が違った。

④リスタ計画：未調査

⑤みのり計画：317kg/10a

⑥ゆいっこ計画：299kg/10a

→ 現地・成績検討会で、対象3法人から「特に復旧間もない水田では堆肥散布の継続が必要だと実感した」との感想をいただいた。

13

活動事項と目標に対する令和3年度の活動（2）

1-1) 水稻土づくりモデル実証ほ設置による効果検証支援



堆肥無施用
(R3.9月28日)



堆肥 1 t/10a
(R3.9月28日)



堆肥 2 t/10a
(R3.9月28日)

14

活動事項と目標に対する令和3年度の活動（3）

1-2) 地域内有機物活用計画・経費試算及び供給量調査（定性的目標）

- ・畜産1法人・3経営体とリスタ，ゆいっこの意見交換を開催（8/24）。
- ・→8月までに畜産1法人が4tダンプでリスタ分154台(617t)，ゆいっこ分35台(140t)運んだ。残りはR4年春まで運ぶこととなった。

散布計画

リスタ 長面内60haに1,200t散布
 （耕作面積120haを隔年60ha散布）

ゆいっこ 長面内32haに 400t散布
 // 北上内30haに 400t散布



畜産法人・個別経営体との意見交換の様子（8月24日）

15

活動事項と目標に対する令和3年度の活動（4）

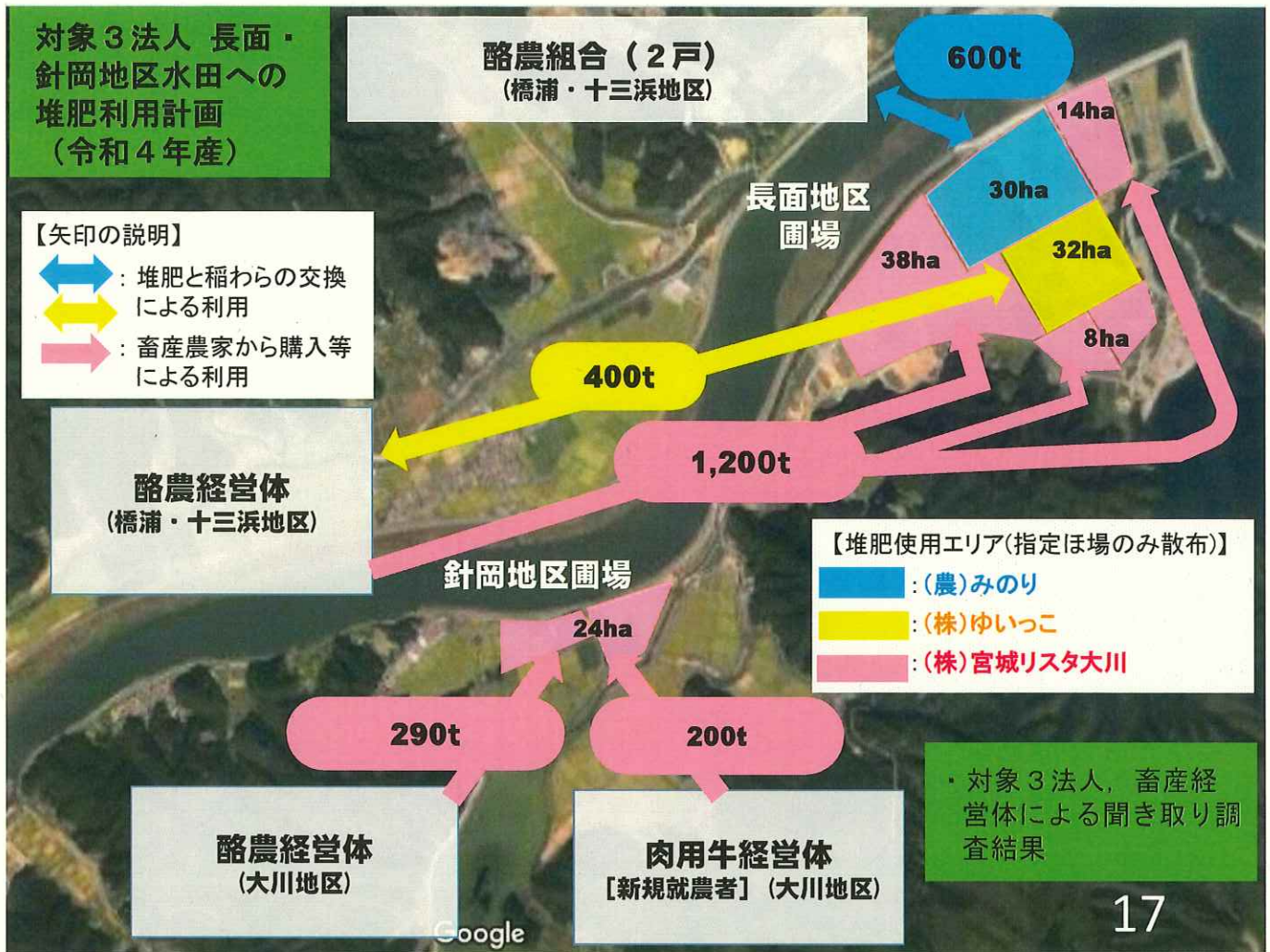
長面地区内ほ場への対象法人の堆肥の散布状況

	株式会社 宮城リスタ大川	株式会社 ゆいっこ	農事組合法人 みのり
R1秋～R2春 堆肥散布	なし	一部散布	一部散布
堆肥供給先	なし	K法人(1法人)	O経営体
R3の長面地区の耕作面積 (ha)	123.8	32.0	54.9
R2秋～R3春 堆肥散布面積 (ha)	22	32	20
堆肥散布量 (t)	437	400	400
堆肥供給先	K法人(1法人)	K法人(1法人)	O経営体
堆肥運搬	K法人(1法人)	K法人(1法人)	O経営体
堆肥散布	リスタ	ゆいっこ	O経営体
堆肥散布面積割合 (%)		35.1	
R3秋～R4春散布計画・見込 (ha)	60 ※1	32	30 ※2
堆肥供給先 (t)	I法人(K法人)	I法人(K法人)	O経営体
堆肥散布量 (t)	1,200	400	600
堆肥散布面積割合 (%)		57.9	

※ 約120haのうち約60ha 2ブロックによるローテーション散布。

※ 約54.9haのうち約30haに散布。

16



17

活動事項と目標に対する令和3年度の活動 (5)

1-2) 地域内有機物活用計画・経費試算及び供給量調査

土づくり実証ほ坪刈り10a当たり収量と令和3年産米概算金から試算

【2t/10a】

売上：543kg/10a

9.05俵 × 9,500円 = 85,975円

経費：堆肥散布作業料金3,670円/10a + 堆肥(2t)2,000円 = 5,670円 無施用との差

収入 - 経費 = 80,305円 (+18,714円)

【1t/10a】

売上：454kg/10a

7.57俵 × 9,500円 = 71,883円

経費：堆肥散布作業料金3,670円/10a + 堆肥(1t)1,000円 = 4,670円 無施用との差

収入 - 経費 = 67,213円 (+13,092円)

【無施用】

売上：389kg/10a

6.48俵 × 9,500円 = 61,591円

経費：堆肥散布作業料金 0円/10a + 堆肥(0t) 0円 = 0円

収入 - 経費 = 61,591円

※ 令和3年産ひとめぼれ1等概算金9,500円/60kg。

※ 令和3年度石巻市標準作業料金マニュアルスプレッダ堆肥散布作業料金 (積み込み含む, 堆肥代は別途)

18

活動事項と目標に対する令和3年度の活動（6）

2 水稲乾田直播栽培実証ほ設置による効果検証支援（定性的目標）

（生育・収量調査，労働力の配分（春と秋作業）の検証）

・対象法人ごとに実証ほの設置（リスタ長面ほ場，みのり長面ほ場，ゆいっこ北上ほ場），生育調査（1ほ場8回，2ほ場3回）・収量調査（3ほ場1回），現地検討会（7/12），労働配分の検証（1ほ場），成績検討会（1月20日）。

○リスタ：R2年はほ場の土壌水分が高く，播種床づくりができなかった。

→R3年3ha実証栽培，R4年は針岡で13ha取り組む（R1年13ha，R2年0ha）。

○みのり：R3年にケンブリッジローラーを導入9.2ha（北上・長面）取り組む，R4年も取組面積拡大を検討中（R2年0ha）。

○ゆいっこ：R1年2ha試験栽培，R2年14ha，R3年にケンブリッジローラーを導入し19ha，R4年19ha取り組む。



ゆいっこ乾田直播
の生育状況（5月28日）



ゆいっこ乾田直播
の生育状況（9月28日）

19

活動事項と目標に対する令和3年度の活動（7）

2 水稲乾田直播栽培実証ほ設置による効果検証支援（定性的目標）

（生育・収量調査，労働力の配分（春と秋作業）の検証）

○ほ場で雑草の発生草種と葉齢を情報共有し，除草剤選定と散布タイミングについて意見交換。→ 現地検討会で生育順調，雑草も少ないことを確認した。移植栽培と遜色ない収量が確保できた。

→坪刈り10a当たり収量：リスタ：536kg/10a（穂数418本/m²）

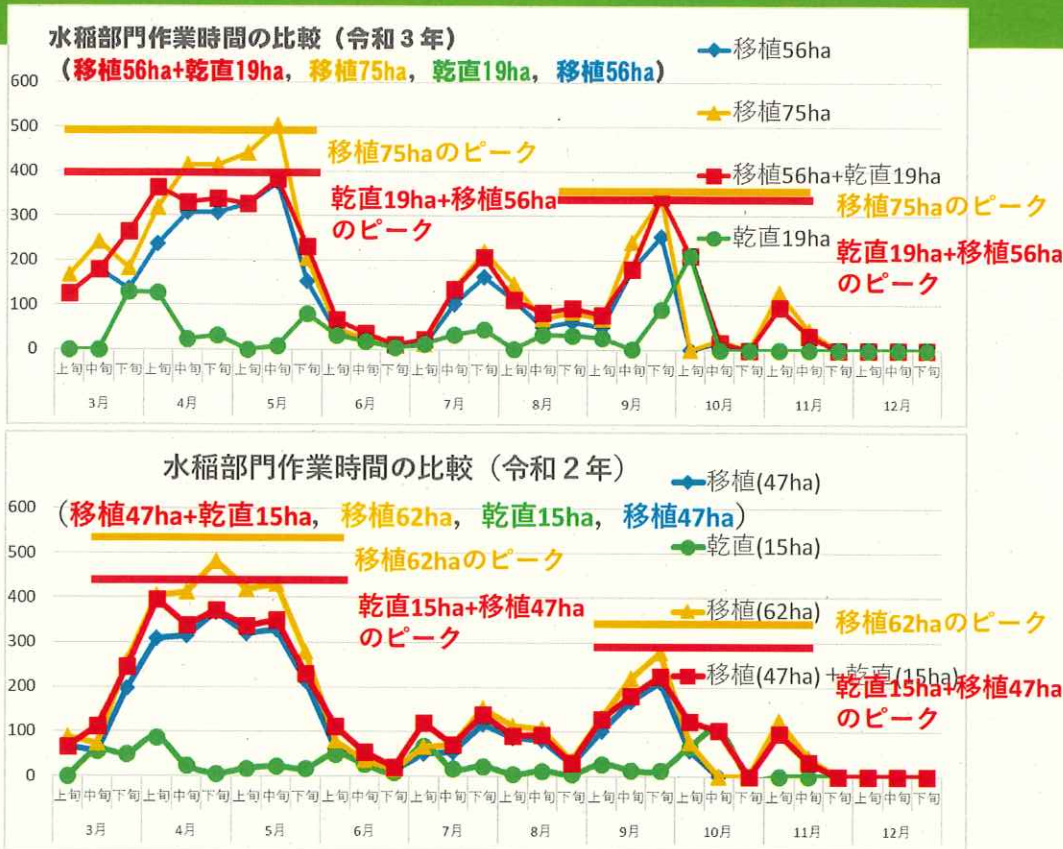
みのり：455kg/10a（穂数487本/m²）

ゆいこ：557kg/10a（穂数459本/m²）

○ゆいっこの作業日誌の記録を基に乾田直播と移植栽培の年間作業時間を月毎に積算するとともに，乾田直播栽培を導入した場合「乾田直播+移植栽培」，導入しなかった場合の「水稲移植100%」の作業時間を試算し，乾直を導入した場合の労働配分をシミュレーションして，成績検討会で対象法人と検証を行った。

20

水稲乾田直播栽培導入による労働時間配分の検証



・ 春と秋の労働時間の集中が分散され、平準化が確認された。

21

活動事項と目標に対する令和3年度末の進捗と自己評価

【自己評価の「○」は達成、「△」は一部達成、「×」は未達成を表します。】

【 定量的数値目標 】

1-1) 水稲土づくりモデル実証ほ設置による効果検証支援

・ 現地検討会、成績検討会を通じて、対象3法人が改めて実証ほでの堆肥の効果を実感したと感想を述べていた。 ○

※ 数値目標：復旧農地での有機物投入ほ場における水稲玄米収量

(坪刈り単収) R1: 430kg/10a → R2: 445kg/10a → R3: 460kg/10a

→ 令和2年度実績545kg/10a, 令和3年度実績543kg/10a ○

【 定性的目標 】

1-2) 地域内有機物活用計画・経費試算及び供給量調査

→ マッチング, R4年産以降の堆肥活用計画と供給計画作成, 耕畜連携による利用・供給仕組みが構築された。 ○

2 水稲乾田直播栽培実証ほ設置による効果検証支援

(生育・収量調査, 労働力の配分(春と秋作業)の検証)

→ 対象3法人での乾田直播栽培取組定着・取組面積が拡大された。 ○

→ 乾田直播栽培導入による土地利用型法人の稲作部門内の労働力の配分(春と秋作業)の平準化効果の確認された。 ○

22

ご清聴ありがとうございました

プロジェクト課題の活動の中で
リスタの若い社員の栽培管理の知識・技術
の習得に向けた研修を支援しました。



リスタの研修会の様子(9月10日)

「水稲刈取適期判断のための籾の黄化程度観察」

組織力強化による 農業法人の経営ステップアップ



計画期間：令和2年度～令和3年度

支援対象：株式会社めぐいと

チーム員：○石原なつ子, 伊藤尚美, 小林雅文, 鈴木喬深, 横田善尚



1

支援対象の概要

株式会社めぐいと

設立 平成25年11月

経営規模 水田 157.5ha (水稲 105ha, 大豆 43ha, 麦 28ha)

畑 210a (ねぎ等)

施設105a (ミニトマト 90a, ほかにイタリア野菜等)

社員 14名, パート 9名

これまでの支援・・・

プロジェクト課題「被災沿岸部の大規模経営体における経営の安定化」(平成29年度～令和元年度)終了に伴い, **新たな課題**が顕在化

「栽培管理技術の社員への継承, 社内の情報共有体制の整備等」

2

本プロジェクトの背景と主旨

会社組織の課題

- 若い人が働き続ける見通しを立てられる会社になるため、給与や人事考査などの社内制度・内規の整備、情報共有体制の構築が課題

園芸部門の課題

- ミニトマト部門で特定時期に作業遅れ。作業の見直しと標準化、収量向上が課題

水田部門の課題

- 令和2年度に新規学卒社員を採用。技術の伝承、技術力向上、情報共有体制構築が課題

活動事項I

社内組織体制・内規整備など支援

活動事項II

ミニトマト部門における作業標準化支援

活動事項III

水田部門の強化支援

プロジェクトが目指すもの

意図する対象の変化 (定性的目標)

- 人事や給与等に関する社内制度が整備され、正しく運用される。
- 作業などが標準化され、社内で認識共有・情報共有されている。
- 社内制度と情報共有体制を元に、人材の採用と定着が図られる。

定量的数値目標

- ミニトマトにおける標準作業 : 1

R2年度までの成果と課題①

活動事項I 社内組織体制・内規整備など支援

○個別面談 (全社員) R2.8月実施

「農業法人経営安定化ハンズオン支援モデル事業」活用 (R元~2)

→組織の課題の洗い出し。

○組織図づくり

→リーダー候補、各社員の役割の明確化、将来像の検討。

○評価システムの構築と評価の試行、給与テーブル作り

→各階層のレベルごとに整理、面談の実施、評価を試行。

○残された課題

- 社員と役員との認識のずれ、情報共有不足。
- 評価制度の基となる中長期計画の策定。

氏名		所属	面談日: 年 月 日			
生年月日	年 月 日	年齢	進 出 月	入社	年月	
現在所属している部署内情報		職人・次長				
項目	課題	具体的課題	改善方法			
課題 現状 状況	作業の遅れ A. 遅い B. 遅すぎる					
	作業の量 A. 多い B. 多いすぎる					
	作業の質 A. 悪い B. 悪い					
	職場環境 A. 悪い B. 悪い					
	給与 A. 低い B. 低い					

個別面談票



組織図

評価項目	評価				評価項目
	A	B	C	D	
目標設定					67 毎年の、材料を削減してコストを減らすか
生産現場					68 現場作業の現場におけるか
					69 現場作業を効率よく行えるか
					70 プランニングシートで作業できるか
					71 現場作業の現場におけるか
					72 毎朝の朝会を満足に行えるか
					73 トラブルが起きるか
					74 安全管理が徹底できるか
					75 使用する車の量を削減できるか
					76 適切な量の作業ができるか

評価項目

R2年度までの成果と課題②

活動事項II ミニトマト部門における作業標準化支援

○栽培講座基礎編



養液ミニトマトの栽培技術に関する認識共有、技術力の向上支援。

○養液滴下量調査



灌水量と施肥量を計算する方法を研修。灌水量・施肥量の想定と実態のズレを認識。

○生育調査



生育調査方法を伝授。自主的・定期的な生育モニタリングの習慣づけを支援。

○残された課題

- ・社員間の情報共有不足（技術面、作業面）
- ・標準作業書（社員・パート誰もが分かる作業手順書）の作成支援
- ・樹勢に応じた肥培管理（養液栽培）、病害虫防除、さらなる技術力の向上

5

R2年度までの成果と課題③

活動事項III 水田部門の強化支援

○水田部門技術講習会



水田部門担当役員・社員それぞれから、作業の振り返りや問題点などを聞き取り。麦類・大豆を例に、栽培技術と適期作業の必要性を社員らと確認。

○残された課題

- ・水稲栽培の管理作業と技術的な背景の理解をふまえた技術力の向上
- ・社員間の情報共有不足

6

R3年度までの成果① - 1

活動事項I 社内組織体制・内規整備など支援

○情報共有を誘導→全体会議，リーダー会議，部門会議の開催支援

→ 情報共有の場の設置（社員間の話し合いが円滑に）
役員，リーダーの役割の明確化（確実な業務遂行に）

部門会議（週1回）
部門役員，リーダー，社員



情報共有（作業計画，進捗，
連絡事項，課題），報連相強化

社員提案（水稻部門 シフト制導入）

リーダー会議（月1回）
役員，リーダー



情報共有（部門会議内容等）
報連相強化

部門間での連携（作業の連携）

全体会議（月1回）
全社員



情報共有（リーダー会議内容等）
報連相強化

7

R3年度までの成果① - 2

活動事項I 社内組織体制・内規整備など支援

○中長期計画策定の支援→農業経営相談所 経営収支の把握，部門別経理の支援

→ 経営状況を数値として見える化。部門別経理の必要性を認識。



普及センター：
経営相談所と民間コンサルに
対象の状況をつなぎ，支援の
方向性，支援内容を調整，ハ
ンドリング



○人事評価運用に関する支援→民間経営コンサルタントの活動と連携

新組織図の作成（部門リーダー等設定），個人面談結果の活用

→ 役割分担の整理（社員が役割を意識しながら仕事するように）
課題の共有（社員の思い，課題を会社のものとして捉えるように）

8

R3年度までの成果③

活動事項III 水田部門の強化支援

○稲作勉強会→技術力の向上支援



→水稲栽培の管理作業と技術的の向上
役員と若手社員の意見交換，コミュニケーションを深めた。



11

活動事項と目標に対する令和3年度の進捗と自己評価

活動事項I 社内組織体制・内規整備など支援

○達成

全体会議，部門会議，リーダー会議の定期的開催 →情報共有，業務改善に
各部門リーダーの配置，面談による業績評価 →人材育成の取組が進んだ
部門別経営収支の把握 →部門毎の課題についての話し合い，
経営に見合った中長期計画の策定に着手

活動事項II ミニトマト部門における作業標準化支援

○達成 ミニトマトにおける標準作業書→1

若手勉強会，巡回指導，視察研修 →栽培技術が向上

病害虫早期発見ECマニュアルの作成・運用支援 →同じ目線で社員が病害虫管理

活動事項III 水田部門の強化支援

○達成 稲作勉強会による若手社員の技術力向上 →水稲部門強化に

12

課題No.3 県品種「にこにこベリー」の収量安定化

計画期間：令和2年度～3年度



対象：(株)トライベリーファーム, (株)いちごランド石巻, (株)イグナルファーム, ((株)サンエイト, (株)アグリ・パレット)

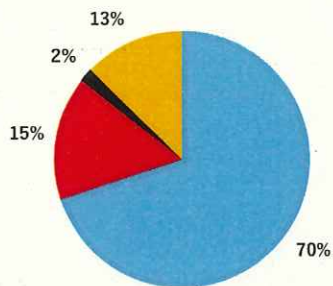
チーム員：◎鈴木香深, 三上綾子, 小林雅文, 今野誠, 渡邊真文

1

課題と背景

令和3年産「にこにこベリー」栽培面積

■みやぎ亘理 ■石巻(法人) ■石巻(個人) ■その他



石巻地域の法人等では令和2年産より宮城県育成品種「にこにこベリー」の栽培に取り組んでいる。

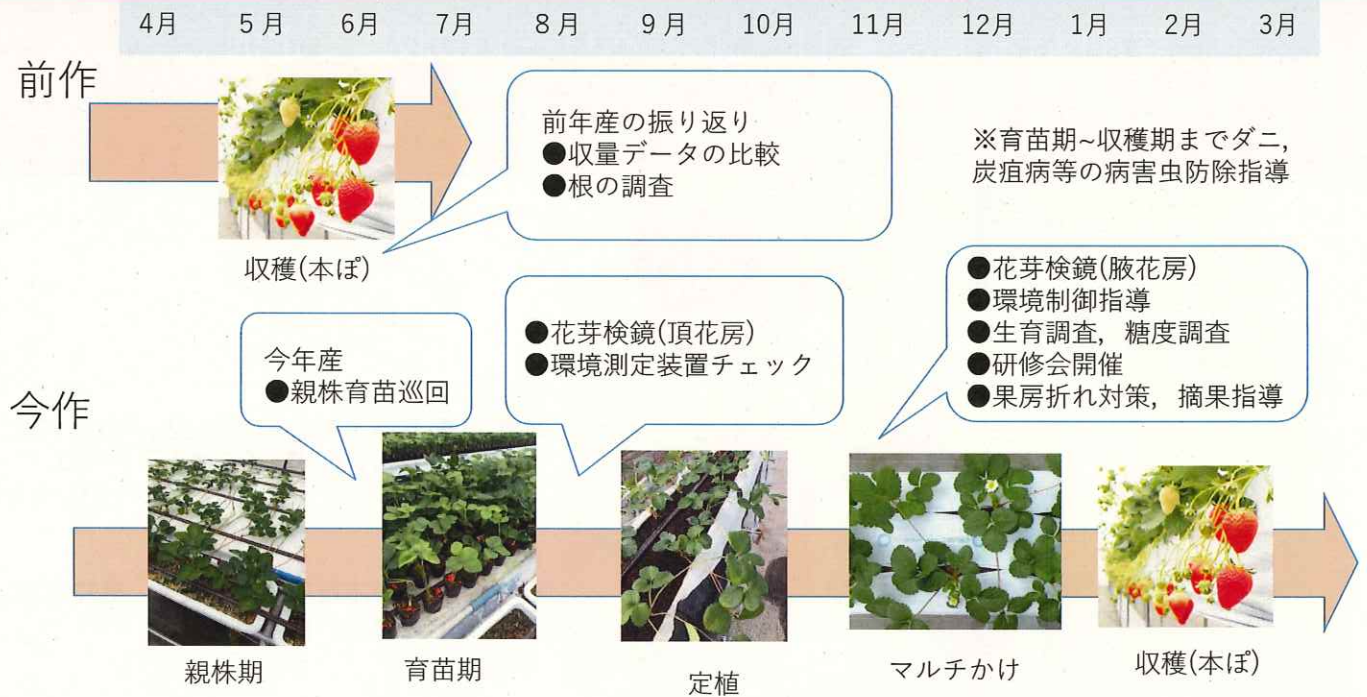
従来の「とちおとめ」とは異なる品種特性から、房折れや中休みなどの問題が見られ、品種と収量の安定化が課題である。

「にこにこベリー」の品種特性に応じた温度管理、養液管理などの栽培管理を習得する必要がある。

	R1年産	R2年産	R3年産	R4年産
宮城県	1.5ha	4.8ha	5.7ha	7.5ha
石巻地域		0.96ha	0.97ha	1.1ha

2

いちごの栽培スケジュールと課題の進捗



3

〈R2年度〉

令和3年産の取り組み

- ① 「にこにこベリー」栽培勉強会の開催
- ② 果房折れ対策への指導
- ③ 現地における摘果指導



新品種の栽培法が未確立だったため、生産者に対し優良事例の情報提供や特性に応じた技術の導入を目的に取り組んだ

4

〈R2年度〉

①「にこにこベリー」栽培勉強会を開催

〈開催時期・場所〉

イグナルファーム，普及センター(10月)

〈内容〉

- ①圃場を見学し，担当者から話を伺った。
- ②座学として県から管内の環境・生育データを提供し，適切な栽培管理について講義した。
- ③参加者から各法人の圃場の状況について報告してもらい，情報交換を行った。

〈参加者〉

社員だけでなく，法人のパート職員も含め20人ほど

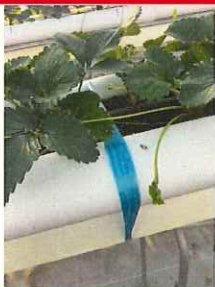


「にこにこベリー」の品種の特性や栽培について情報共有を図ることができた。腋花房の花芽検鏡を依頼する生産者(4法人)，反射資材を果房折れ対策として試験的に導入する生産者(2法人)が見られた。

5

〈R2年度〉

②果房折れ対策への指導



法人A



法人E



法人C



法人B, C

果房が長くなりやすい「にこにこベリー」の果房折れを防止するため，農園研と連携し反射資材の設置による対策を指導し，各法人の優良事例の情報提供を行った。

6

〈R2年度〉

現地における摘果指導

試験場職員を講師とした摘果実習



摘果前



摘果後



摘果の1ヶ月後に測定した値

	摘果区	未摘果区
糖度(Brix%)	8.7	6

生産者も交えて摘果作業を行った。摘果によって、果実の肥大、糖度の向上など品質の改善が見られた。生産者に技術習得だけでなく、摘果作業の効果、必要性を実感してもらった。

「にこにこベリー」は既存品種より着果性が高く小玉化しやすいことから、摘果の指導を行った

〈R3年度〉

令和4年産の取り組み

- ① 6月における根および培地の調査
- ② 親株育苗巡回
- ③ 生育調査、糖度調査に基づく指導
- ④ 環境データに基づく指導(環境制御指導)



〈R3年度〉

①6月における根および培地の調査



培地の状態や根の張り方について話し合いを行っている様子



古い培地を中心に根の褐色化が見られる

作の終わりに株を掘り返して、培地の状態や根の張り方を生産者を交えて確認することで、培地の更新や苗の植え方など次作に向けて改善を図ることができた。

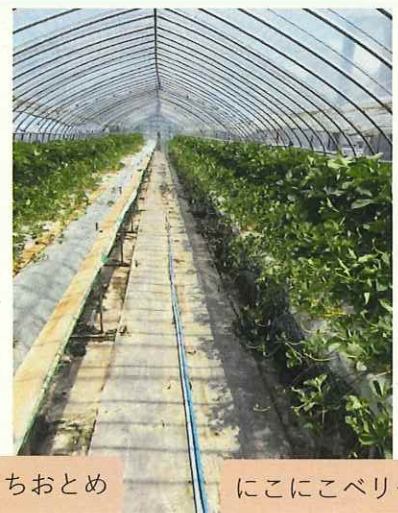
9

〈R3年度〉

親株育苗巡回



葉色が淡く、徒長気味の様子。



とちおとめ

にこにこベリー

例年、親株期から育苗期にかけて雨天曇天が多く、苗の軟弱徒長が見られるため、寒冷紗の取り外し、液肥施用などの指導を行った。その結果、良質な苗を十分量確保できた

10

〈R3年度〉

生育調査、糖度調査に基づく指導



レポートに記載した草高推移

〔イチゴ〕

生育と環境のウィークリーレポート 〔(株)トライ(須江)〕

〔令和3年12月6日(月)～令和3年12月12日(日)〕

生育状況等

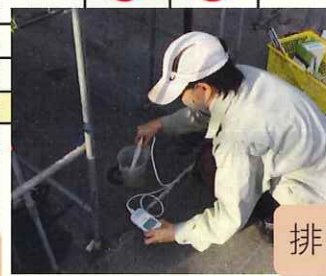
	調査日 (月/日)	草高 (cm)	葉柄長 (cm)	葉数 (枚)	給液EC (mS/cm)	排液EC (mS/cm)	糖度
本年	3週前 11月9日	27.7	19.8	10.2	1.0	0.7	8.2
前年	2週前 11月17日	26.5	18.2	10.5	1.0	0.6	8.5
	先週 11月30日	25.7	13.0	12.5	1.0	-	8.2
	今週 12月9日	19.0	12.6	12.6	1.0	0.8	8.5



糖度調査



生育調査



排液調査

定植後、10日おきに生育調査および糖度調査を行い、巡回時にウィークリーレポートとして生産者に提示し、栽培管理についての意見交換を行っている

〈R3年度〉

環境データに基づく指導(環境制御指導)

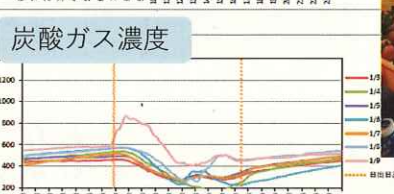
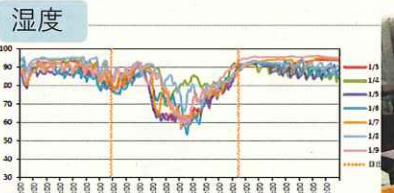
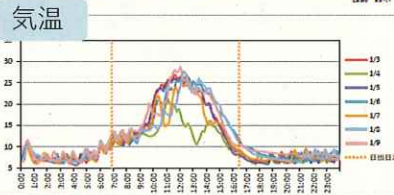


ほ場に設置した環境測定装置

〔イチゴ〕 WVI環境グラフ 〔(株)トライ(松田)〕

〔令和4年1月3日(月)～令和4年1月9日(日)〕

茨城県産農産物検査センター 松田 勲志



※図中の「日出時刻」は、1月3日 仙台市の日出時刻(日出時刻 6:53、日没時刻 16:28)

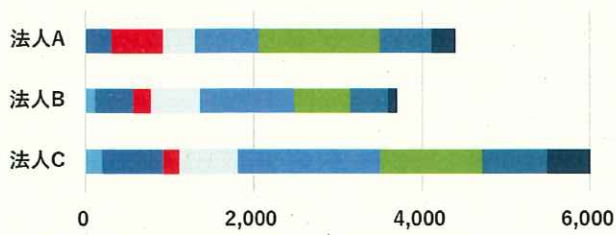


作成したウィークリーレポートを用いた指導

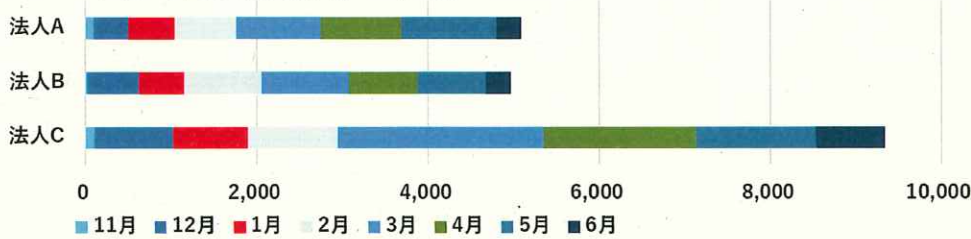
〈2年を通してのまとめ〉

令和2年産、3年産の収量実績

令和2年産月別単収(kg/10a)比較



令和3年産月別単収(kg/10a)比較

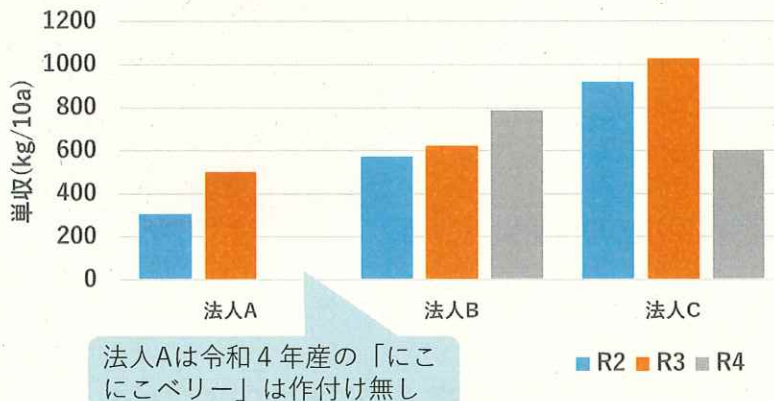


3法人平均で令和2年産：4.7/10a，令和3年産：6.5t/10aと大幅な収量向上が見られた。また，2年産で見られた1月の中休みが改善された

〈令和2～4年産〉

年内収量データについて

単収法人間比較



法人Cは令和4年産において収穫期を分散させるために半分ほど夜冷処理を行わなかったため，年内収量の減少が見られるが，3法人とも令和2年産から4年産にかけて年内収量の向上が見られる

目標に対する進捗状況

意図する対象の変化

- ・「にこにこベリー」の品種特性を理解し、養液管理、温度管理、栽植密度などを考慮し栽培できるようになる。



房折れ対策や適正な養液管理、摘果作業などを指導した結果、特性に応じた栽培を行っている

：○

- ・「にこにこベリー」において「とちおとめ」と同等以上の収量が確保できるようになる。



令和3年産において、3法人全てで「とちおとめ」の単収3.3t/10a(宮城県平均：全農みやぎ資料)を上回っている

：○

15

目標に対する進捗状況

定性的目標

- ・「にこにこベリー」の栽培技術が定着する。



花房折れ対策や摘果作業など
品種の特性に合わせた技術の定着が見られた：○



定量的数値目標

- ・「にこにこベリー」の11月から2月末までの収量を2.5t/10aにする。



令和2年産の1.5t/10aから令和3年産は2.3t/10aと大幅な向上が見られ、概ね目標を達成している：○

16

地域活性化に向けた高収益作物 (アスパラガス)の導入・定着

計画期間：令和2年度～令和4年度

対象名：アスパラガス研究会(20経営体)

担当者：佐藤泰征、伊藤尚美、小野愛実、今野誠、濁沼小百合

1

1) 課題の背景

- 震災後の農業復旧、持続的な発展、農業所得の向上
- アスパラガスは市場単価1,400円/kgと高収益作物
- 「アスパラガス採りっきり栽培」の技術実証(H30)
(病害対策で1年養成株全収穫栽培法を明治大学とパティエリイ(株)が共同開発)
- JA等と連携、アスパラガス研究会(20経営体)設立



アスパラガスの導入定着、生産体制の確立、農業所得の向上、地域農業の活性化を目指す

2

2) 目標

定性的目標

- ◎アスパラガスの生理生態を理解する
アスパラガス採りっきり栽培を習得する
- ◎生産者が主体的に販売戦略を検討する

定量的目標

年度	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年
面積	2a	25a	50a	100a

3

3) 普及活動の内容

①安定生産技術に関する技術力向上

アスパラガス栽培管理勉強会の開催、収量調査

②販売先確保、単価向上に対する販売力向上

販売戦略会議の開催など

③関係者間のネットワーク力向上

栽培セミナーの開催、ブログ等の情報発信

4

①安定生産技術に関する技術力向上

◎アスパラガス栽培管理勉強会を3回開催

日時	4月7日		
内容		支柱・病害虫編	黄化刈取り・育苗編



5

②販売先・単価確保のための販売力向上

- ◎アスパラガス販売戦略会議（7月28日）
- ・作柄と他産地の状況（パティオアソサイツ(株)）
 - ・管内の生産販売状況（石巻普及センター）
 - ・石巻市場の取扱い（(株)石巻青果）
 - ・直売所の販売状況（グリーンサムいちば）
 - ・JAの支援策（JAいしのまき）



- ・採りつきり栽培の収穫期4～6月、4月遅霜被害、後作の輪作体系が重要
- ・R3年栽培面積54a、市場出荷2人、直売所販売9人、販売額約20万円
- ・石巻市場では山形と福島産を3～9月、秋冬期は刈り等輸入品を取扱い
- ・直売所では4～6月が人気、ハウス立茎栽培で9月まで収穫してほしい
- ・JAいしのまきでは3a以上作付、JA出荷で種苗等経費への補助有り

6

③関係者間のネットワーク力向上

◎ホームページやブログにアスパラガス情報を掲載



7

4) 成果指標に対する評価

①安定生産技術に関する技術力向上

△3回の栽培管理勉強会で採りつきり栽培は習得、病害対策が課題

○栽培面積(R3)50aに対し(実績)54aで達成→(R4目標)100a

②販売先・単価確保のための販売力向上

△20人中市場出荷2人、直売所9人で販売額は約20万円と少ない

△採りつきり栽培の経営試算、雨よけ栽培など安定生産の検討

③関係者間のネットワーク力向上

△ブログ等の情報発信、情報共有の促進

8